

# 私の放送人生

真冬の青森取材二題

中村 登紀夫

（TBS・WOWOW）

▼八甲田北東麓

一夜で膝も埋まる雪が



この新聞広告で、冬の八甲田山の取材を思い出した。

昭和32年12月、3キロのデンスケを担いで、山林アナウンサーと青森駅に降りると、この冬、街に雪がなかった。

## ●遭難の碑を過ぎて

日本一貧しい開拓部落へ

ラジオ東京、毎朝の15分番組『ラジオスケッチ』の取材だった。

八甲田山麓の田代平に日本一貧しい開拓部落がある。戦後の引揚者に与えられたという。

市役所を訪ねた。教育長という人が応対、あなた方だけではムリ、案内を兼ねて冬山に強い職員をつける。羊羹を一人分で二本買いなさい、私は冬の満州を知っている。もしものとき、羊羹一本で一日は生きられる。

翌日、ジープには、見るからに屈強そうな若い職員が待っていた。山麓への道も雪がない。一時間余りで車を降りると、「これから先は歩きます」、開拓部落への道の角に避難小屋らしい家がある。

デンスケは助っ人の職員が肩に担いでくれる。一時間余り歩く。明治の八甲田雪中行軍遭難の碑があった。悲劇が嘘のようだ。空は晴れ、雪はない。



「一休みしましょう」、私が担いだデンスケ用の15分テープ10本は結構重い。道端に座る：山林アナは甘党だ。この天気で、もしものことはなさそうだ、羊羹食べよう：案内の山男にも勧め、まず二本平らげた。

一時間ほど登ると、道端に温泉が湧いている。三、四人一緒に入れるほどの野天風呂。田代平は温泉地だった。

開拓部落に着く。ひと言に引揚者といっても様々だ。満蒙開拓もあれば日本の信託統治の南洋群島にいた人もいる。



満州での富士見村開拓団

必ずしも農業が得意ではない。しかも冬の寒さは厳しい。

この開拓地の人がどこの引揚かは記憶にないが、与えられた土地の開拓が相当に苦しい毎日だったことは確かで、話は夜遅くまで続いた。「もう、休みましょう」と付添が気を使って、ではまた明日と床につくころ、「雪が」と声が聞こえた。

## ●陽が傾き、雪が舞う道を

翌朝、戸を開けると膝が埋まるほど雪が積もり降りつづいている。だが、まだ話の続きがあった。

昼過ぎ、案内の山男が厳しく命令した。「もう終わってください、この雪です。来たときとは違う。あなた方が、どのくらい歩けるか、急いで」、開拓地の人に挨拶をして外へ出る。雪は膝を超えていた。

取材服の下は厚着をしているが、靴は、この雪に耐えられるのか。

山男が冬山の危険を頭に叩き込ませた。「林の中は雪が舞うことがないので比較的安心ですが、灌木が続く道は、風で枝に積もった雪が舞うと前が見えなくなります」

大柄な彼は積もる雪を踏み分けていくが、ついていくのが大変。

来たときは2時間余りだったが、ジープまでどのくらいで着くのか、道半ばと思われるころ、「ジープが待ってくれてるか、先に行きます。私が雪を踏んだ跡を歩いて来

彼にどのくらい遅れたろうか、  
やつと着く。ジープがいた。

「予定は3時までということでしたが、6時までとは待ちました」、山男の足で6時直前に間に合ったのだった。ジープに座る。暖かい、助かった。

下まで1時間。7時ぎりぎりに

市役所の玄関に着くと、教育長をはじめ大勢の職員が「バンザイ」と手を挙げた。

●あわや、遭難救助隊が！

教育長にお礼を言うと、もし、7時までに帰らなかつたら遭難救助隊が出動することになっていた。実は昨日、警察署長にあなた方の話をした。署長が「とんでもない、あの雲を見て、今夜は雪だ、山の経験ないラジオ東京の人を、なんてことを」、遭難救助隊を待機させた。

八甲田死の行進が脳裏をよぎつた。案内の彼も一緒に宿に帰り風呂に浸かると生き返る気分。山林君には悪いけど、彼も一緒の夕食の熱燗が最高に美味かった。

## ▼陸の孤島 竜飛へ

一日おいて、「帰れなくなる。  
行くな」とデスクに言われた竜飛  
へ。冬の竜飛に行きたいという思  
いはこの年十月に出版された濱谷  
浩の写真集『裏日本』を見てます  
ます駆り立てられた執念のような  
ものだった。中学時代には凍った  
諏訪湖沿いの道を往復三里、塩尻  
降ろしの風をうけながら学校まで  
通ったので寒さには自信があつた。

●行けるとこまで行く

あとは歩け

三厩まで津軽便鉄道で行く。  
吹雪が客席まで舞い込んできた。

役場に寄る。竜飛のこと、岬への交通手段などを聞く。

竜飛は、冬、陸路が閉ざされ、波荒い津軽海峡は船も運航できず、青森から、食糧など生活物資も届かない陸の孤島で、春には野菜もなく、野草を食べることもあるという。

竜飛崎まで、どうやって行くか、役場に答えはなかった。バス会社

は「あつちでトラックに聞いて」。

トラックも「竜飛はいかねえ」……

万策尽き、あきらめるほかないか。

ここまで来て悔しかったが、駅前  
のラーメン屋に入って温かい汁を  
吸っていたとき、戸をガラリと開  
けて男が来た。「竜飛行きたいつ  
てのは、あんたらか」……「そうだ  
よ」「オレのタクシーで、行ける  
とこまで行つて、あと歩くなら、  
すぐに行くが」「頼むよ。で、帰  
りも迎えに来て、青森まで行く。  
一万円払う」。その5年後でも、  
赤坂から阿佐ヶ谷經由東武練馬ま  
でのタクシーが860円だった。

●こんな冬に

濱谷さん以来、初めて

陽が落ちて車窓の右に津軽海峡の荒波が：行けるとこまで行つて、その先、どれほど歩くのか。どのくらい乗つたのか。道に雪はない。が、車が停まる。「もうここまで」、「ここから竜飛まで、どのくらい」、「三里くらいかねえ」。

海沿いの道は狭く、津軽の海の塩吹雪が凍えそうな身体に吹きつける道を、デンスケを担いで三里か、泣きたい。

車に通れないのは、夜、荒波を避けて陸揚げされた舟がずらりと並んで道を塞いでいるからだ。この辺りの集落は岸からすぐの

(甲) No. 1	13000 F	課長印
発行者 ※ 会社	昭和 37年 1月 12日	連託者名 ※ 佐藤 隆雄
時間 ※ 12時 00分 から		返却期限 ※ 4日
時刻 ※ 12時 30分まで		備考 ※ " "
経路 ※ TBS - 中野 - 上野	料金 ※	手数料 ※ 860円 -
連絡先	放月 連日	
添付品目 ※		取合印 ※

(印) 37-12

(1) 各項目記入の上、申請は使用直前に所属機関へ提出して下さい。  
 (2) 館用印は必ず二箇所以上して貰ってください。  
 (3) 本館の貸出記録簿として扱われます。

**東京放送**

絶壁にへばりつくように家がある。道に並んだ舟の舳先と玄関の間は 30 センチくらい。車どころか歩くのも大変。デンスケを落とさないように舟の舳先を慎重にまたぐ。いくつかのこうした集落の間は暗い道になる。海鳴りと暗黒な海にそそりたつ奇怪な形の岩が空恐ろしい。所々短いトンネルもあり、抜けると遠くに竜飛灯台の光が見え隠れするが、歩いてても歩いてても光に近づかない。

何時間歩いたろう。竜飛だ。

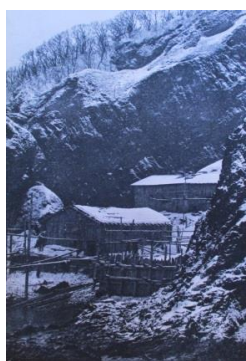
池谷旅館という宿がある。萩元晴彦さんが、以前、竜飛取材を考えていたのだろう、濱谷浩さんの名刺に書いた紹介状があり、それを貰っていた。真冬の突然の客におかみさんが驚く、「こんなとき来たのは、濱谷浩さん以来、初めて」。

とにかく温かくなりたい。熱いもの食いたい。かけうどんが今まで食べたことないほど美味かった。一晩明けて、まず灯台へ、津軽と日本海を航海する船舶の命の灯台。苦労話を聞いたあと、電話を借りて社に連絡、「竜飛に来ちゃいました」「ええ、気をつけて帰ってこいよ」

## ●ジャガイモの主食

### 古代と変わらぬ漁撈

濱谷さん「海は咬みつくような波をもつて襲いかかる。岩と、波と、風と、雪の、凶暴なこの地にも、人は部落をつくった。人間も、家も、船も、必死になって、この狭い土地にへばりついている」



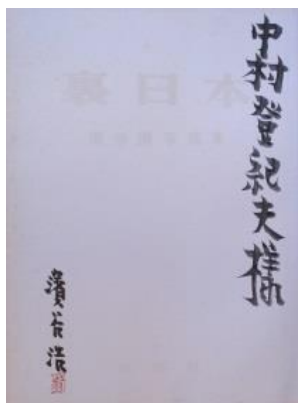
幸いに雪はなかった。手あたりばったり部落の家を訪ねる。何軒目かで昼になっていた。家族が食卓を囲んでいる。昼飯をと出されたのは、ジャガイモに米粒がこびりついている主食だった。米が貴重な冬の竜飛の常食だった。

貧しそうな港の真冬、でも猟師がいた。濱谷さんは書いている。《ここの漁撈は：突き漁や、一本釣などで、それが彼らの生活手段であり、家族を養う元手なのだ》取材を離れて太宰治が怖い怖いと言ったという、お化け岩に座ってみたり、薄青い空を仰ぎながら冬の竜飛を楽しんだ？。

## ●行った人しか分らない

何年後か『朝の談話室』という番組が濱谷さんの話を録るといって同行した。

『裏日本』の竜飛の写真は、みな鮮やかなモノクロではない。青みがかった、ややかすんで、決してきれいとは言えない。「なんで、こんな薄青い汚れた色にしたんだ」、写真仲間には酷評されたと言う。「でも、竜飛の景色も空もこの色でした」、「そうでしょう。行った人にしか分らない」と濱谷さんは喜んでくれた



二日後の昼過ぎ（行けるところまで）のタクシーは、陸揚げされた船も少なく 20 分ほど歩くとこ

ろまで来てくれた。青森までの帰り道、義経寺を案内してくれた。義経は平泉からここまで逃れ、三厩から蝦夷に渡ったという伝説の寺だ。また、すでに、青函トンネル試掘のための海水をくみだしているところがあった。

### ▼田代平、竜飛、その後

田代平は、一時、温泉別荘地になったと聞いたが今は廃れているとか。

後、竜飛には平成に入って 2 度行った。今は山沿いに道があり、「いける所」に竜飛がある。もう、池谷旅館はない。



写真のような姿も見られず結構な観光地になっていた。（竜飛の写真は『裏日本』から）